

寺口遺跡発掘調査概要

—四條畷市上田原所在—



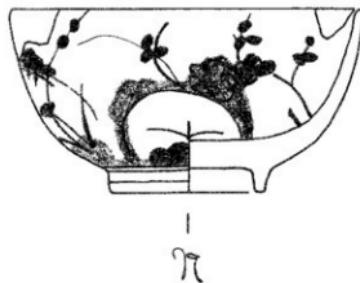
一
九

1999年4月

四條畷市教育委員会

寺口遺跡発掘調査概要

— 四條畷市上田原所在 —



1999年4月

四條畷市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成10年度の両国橋線沿線造成工事に伴う発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は、住宅・都市整備公団の依頼により四條畷市教育委員会が実施した。発掘・整理調査は、平成10年12月16日に着手し、平成11年4月30日に終了した。
- 3 発掘調査は四條畷市教育委員会生涯学習推進室技師 村上 始を担当者とし実施した。調査にあたっては、同主任技師 野島 稔の指導を得た。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、地元の土地所有者の方々と住宅・都市設備公団の御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。
- 5 現地においては、財団法人枚方市文化財研究調査会 櫻井 敬夫氏のご教示を得た。記して感謝の意を表したい。
- 6 出土遺物の整理・実測については、村上 始・佐野 喜美・田伏 美智代・斎藤 佐智子が行なった。
- 7 本書の執筆は村上 始が行なった。

本　文　目　次

例　　言

第1章　遺跡の位置と歴史的環境……………1

第2章　調査に至る経過・調査の成果………3

第3章　まとめ……………14

図　　版

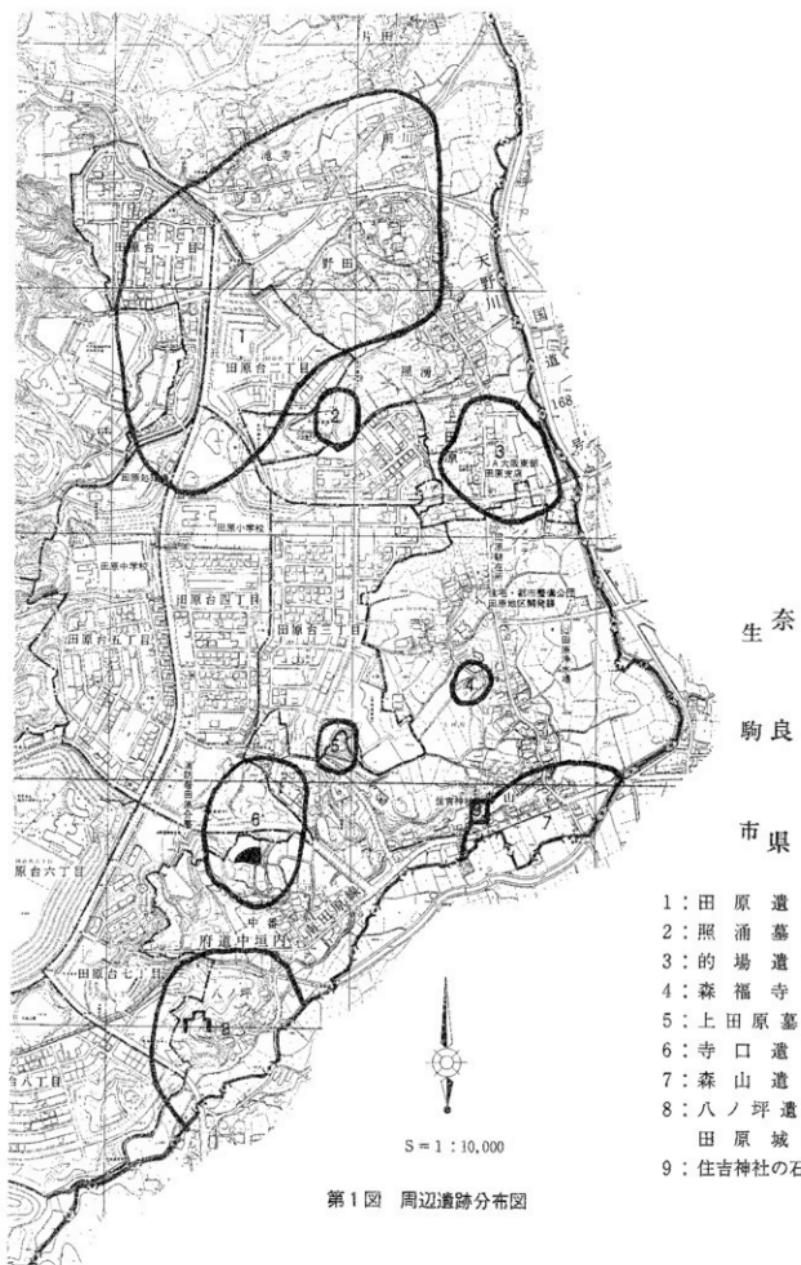
報告書抄録

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、東は奈良県生駒市・西は大阪府寝屋川市・南は大阪府大東市・北は大阪府交野市と寝屋川市に接しており、東西に連なる生駒山系をはさんで西側の平野部と東側の田原盆地におおきく分けられる。市内には、ほぼ中央部を東西方向に清滝街道が、平野部には南北方向に西側から河内街道・東高野街道が通じている。田原地区には、天野川に沿って南北方向に磐船街道・ほぼ東西方向に古堤街道が通じている。今回報告する寺口遺跡は、四條畷市の東部・生駒山系の北東部の山裾に位置する南北約2km・東西約0.8kmの範囲の田原地区に所在し、その東端は、北流する天野川を府県境として奈良県生駒市と接している。この地区的地質は、東部が沖積層粘土及び砂礫質で西部の丘陵地は花崗岩及び大阪層群からなっている。

文献における田原地区の初見は、保延5年（1139）の『小松寺奉加帳』で、それによると土豪が中心となって開発したことがわかる。その後開発領主としての権利を維持するために七条院に寄進して七条院領田原荘となり、修明門院・大覺寺統へと継承されていく。

田原地区的遺跡としては、昭和50年頃から始まった住宅公団の開発に伴う発掘調査により縄文時代・弥生時代・中世の集落跡であることが判明した田原遺跡のほか、平安時代の寺社跡である森福寺跡・鎌倉時代の集落跡である的場遺跡、縄文時代・古墳時代・中世・近世の集落跡である森山遺跡・中世～近世の両墓制墓地である上田原墓地・照涌墓地・南北朝時代～戦国時代の集落跡・城館跡である八ノ坪遺跡・田原城跡があげられる。その他の文化財としては、大阪府の文化財に指定されている住吉神社の石槽や市内に7基現存している十三仏のうちの2基があげられる。また今回調査を行なった地区の北側では、平成6年度の発掘調査で田原城主田原対馬守の墓と寺跡（千光寺）を発見した。この地には、田原城主田原対馬守の墓と伝えられる五輪塔が存在していたが、口伝の他には数点の文献が存在するのみで詳細については不明であった。また寺に関しても千光寺という真言宗の寺が存在していたという口伝の他、「寺口」という小字名が残っているだけであった。そのような状況のなか発掘調査によって墓や寺跡などの遺構とともに、当時たいへん貴重であった青磁袴腰香炉などの輸入磁器や『千光寺』刻印瓦をはじめ多くの遺物が出土し、その存在が明らかになった。なおこの青磁袴腰香炉は、平成11年2月に大阪府の文化財に指定された。（第1図）



第1図 周辺遺跡分布図

第2章 調査に至る経過・調査の結果

四條畷市上田原地区において、両国橋沿線造成工事に先立ちその予定地において遺跡の有無を確認するための試掘調査の依頼が、平成10年度に住宅・都市整備公団よりあった。この地域は寺口遺跡に隣接していることから、遺跡の有無と基本層序を確認する必要があると判断したため、平成10年2月3日と12日に合計19箇所で試掘調査を実施した。その結果、5箇所において中世から近世の遺物包含層などを確認した。そのため文化財保護法第57条の6第1項の規定により、平成10年7月30日付けで住宅・都市整備公団より遺跡発見の通知が提出され、寺口遺跡の範囲を拡大した。その後数回の協議を重ねた結果、遺跡が破壊される箇所においてはその記録保存のために発掘調査をすることとなった。

所在地は四條畷市大字上田原、調査面積は約861m²、調査期間は平成10年12月16日～平成11年2月10日であった。

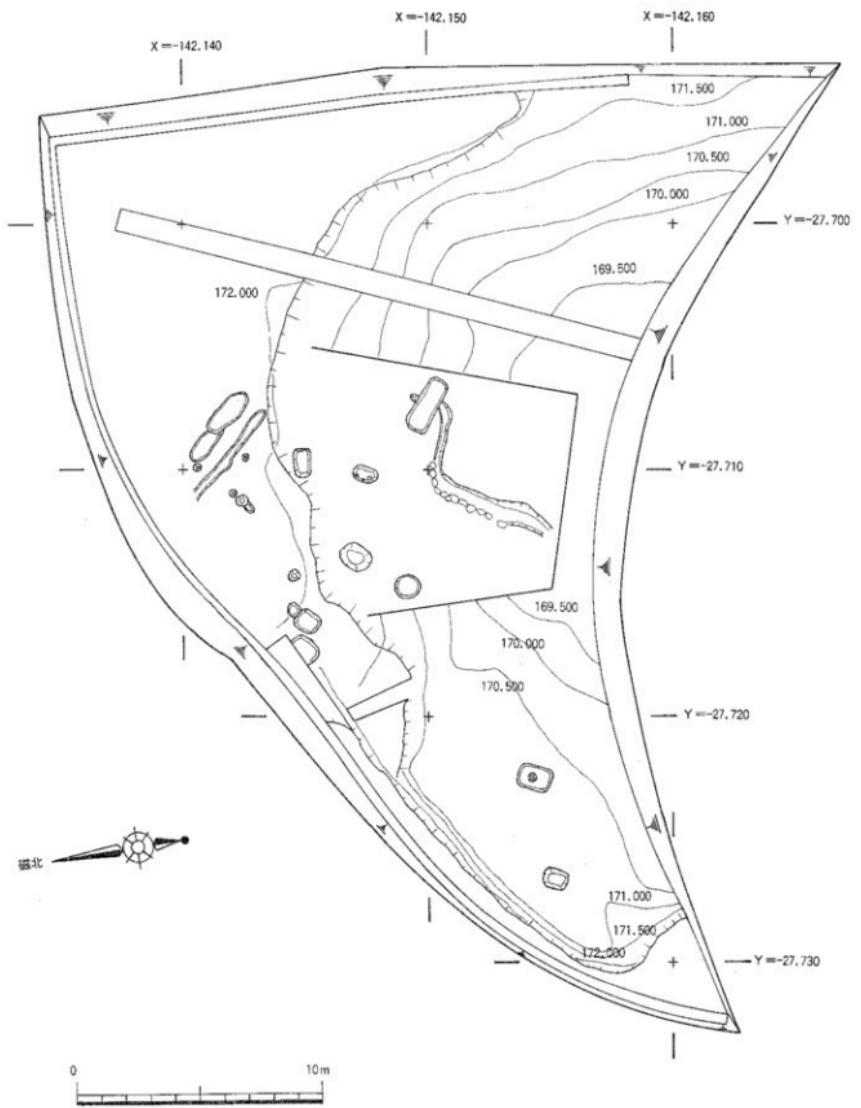
この遺跡が所在する地域は、現在西側が開発により削平されているが飯盛山系から東に派生する一つの屋根上にある。現況は標高約173m前後の耕作地であった。試掘調査では中世の瓦器碗や瓦質土器・土師器皿、近世の陶磁器が出土している。

(1) 基本層序（第3図）

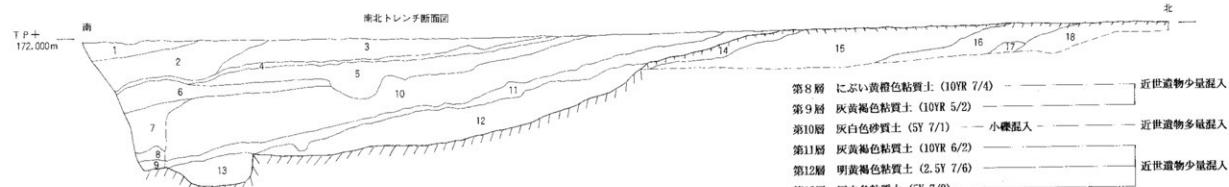
約10～30cmの耕土を機械掘削したところで、遺物包含層の堆積状況を詳しく確認するために幅約1m・長さ約23mのトレンチを地形に沿って南北方向に設定した。その断面を観察すると、耕土下で整地のための埋め戻し土を確認した。この堆積層の厚さは約10cm～1.2mで、地形に沿って南へ向かうほど厚く堆積している。この土層からは近世の遺物に混じって近代のものが出土していることから、近代に耕作地を造成するために整地したものと考えられる。またトレンチの北端から約8mのところで地山面が南北方向へ落ち込んでいることが判明し、遺物包含層は近世の遺物を少量含む層と多量に含む層に大別することができた。調査は、平面で落ち込みのラインを確認することと北側の地山面での遺構の検出に努めた。その結果、落ち込みのラインから北側の地山面（現地盤から約30cm下がった面）と、南側の包含層上面（現地盤から約75cm下がった面）で遺構を確認した。地山は、南側では黄橙色粘土・小礫混じり(10YR 7/8)、北側では黄色細砂・しまりがやや強い(2.5Y 8/6)であった。

(2) 遺構（第2・4・5図、図版1～3）

今回検出した遺構は、溝2本・土坑11基・Pit 7基・石垣・集石であった。また調査地区の西端の東向き斜面には、多くの遺物と共に10～50cm大の花崗岩の自然石が散乱していた。遺構の多くは遺物が小片であったり出土しなかったため、詳細な時期を特定できなかった。しか



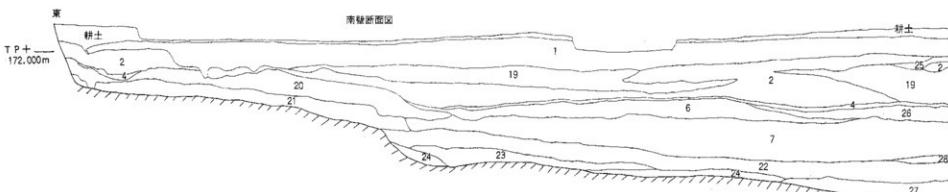
第2図 遺構平面図



南北トレンチ断面 土層説明

- 第1層 灰黄色砂質土 (2.5Y 7/2) に淡黄色粘土 (5Y 8/4) ブロック混入
- 第2層 橙褐色砂質土 (7.5YR 6/6)
- 第3層 にぶい黄色砂質土 (2.5Y 6/4) に淡黄色粘土 (5Y 8/4) ブロック混入
- 第4層 淡灰色粘質土 (N 3/0) — 近代と近世の遺物混入
- 第5層 灰色砂質土 (5Y 5/1)
- 第6層 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2) — 近世遺物多量混入
- 第7層 黄褐色粘質土 (2.5Y 5/3)

- | | | |
|------|---------------------------|-------------------|
| 第8層 | にぶい黄褐色粘質土 (10YR 7/4) | 近世遺物少量混入 |
| 第9層 | 灰黃褐色粘質土 (10YR 5/2) | |
| 第10層 | 灰白色砂質土 (10Y 7/1) | — 小礫混入 — 近世遺物多量混入 |
| 第11層 | 灰黃褐色粘質土 (10YR 6/2) | |
| 第12層 | 明黃褐色粘質土 (2.5Y 7/6) | 近世遺物少量混入 |
| 第13層 | 灰白色粘質土 (5Y 7/2) | |
| 第14層 | 黃褐色粘土 (10YR 8/6) | — 小礫混入 — |
| 第15層 | 橙色粘土 (7.5YR 6/8) | — 小礫混入 — |
| 第16層 | 浅黃褐色粘質土 (7.5YR 8/6) | |
| 第17層 | 浅黃褐色粘質土 (7.5YR 8/4) ブロック状 | |
| 第18層 | 17層土に16層土混入 | |

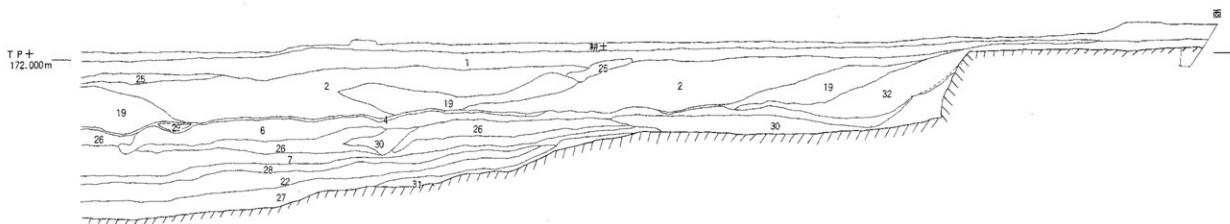


- 第29層 灰白色粘質土 (5Y 8/2) —
- 第30層 淡黄色細砂 (5Y 8/4) — 近世遺物多量混入
- 第31層 黄色粘質土 (2.5Y 8/6) —
- 第32層 灰白色砂質土 (5Y 7/2) —

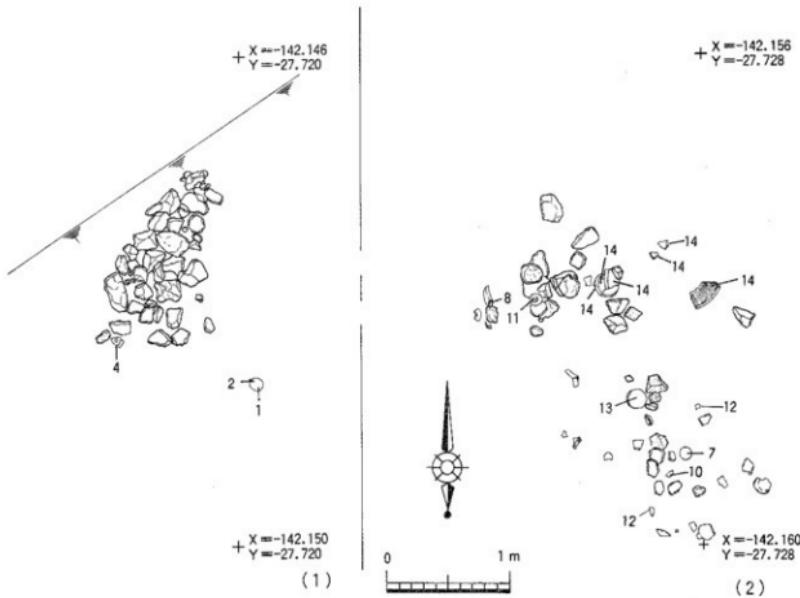
南壁断面 土層説明

- | | | |
|------|----------------------|----------|
| 第19層 | 淡黄色細砂 (5Y 8/3) | |
| 第20層 | 黃褐色砂質土 (2.5Y 5/2) | |
| 第21層 | にぶい黄色砂質土 (2.5Y 6/4) | |
| 第22層 | 第12層と同じ | |
| 第23層 | 黄色粘質土 (2.5Y 8/6) | |
| 第24層 | 褐色粘質土 (10YR 4/4) | |
| 第25層 | 灰色砂質土 (N 6/0) | 埋灰土 |
| 第26層 | 黄灰色粘土 (2.5Y 4/1) | |
| 第27層 | にぶい黄褐色粘質土 (10YR 4/3) | |
| 第28層 | にぶい黄褐色粘質土 (10YR 7/4) | 近世遺物少量混入 |

0 2 m



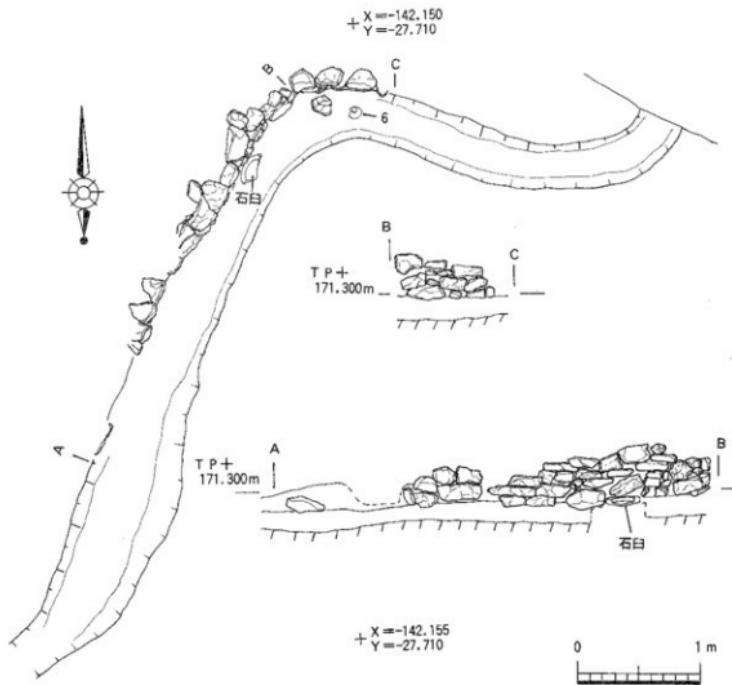
第3図 調査地区断面図



第4図 遺物出土状況図

し遺構面上層の包含層からの出土遺物を観ると、中世以前の遺物が混在しているもののそのほとんどが近世の遺物であり、近代以降の遺物が混在していなかった。このことからそれぞれの遺構は近世のものであると推測される。(図1-2・2-1)

調査地区の北西部において、数十個の10~30cm大の花崗岩の自然石が集中して出土した。当初は下部施設をもつ遺構の可能性も考えたが、調査の結果それらは確認しなかった。石の間からは土師皿(第4・6図-1・2、図版4-1・2)・信楽焼挽り鉢(第6図-3、図版4-3)・陶器碗(第4・6図-4・5、図版4-4・5)などが出土している。これらの自然石はこの場所の地層では露出していることはなく、約300m南側の河川敷でみられるものである。このことから何らかの理由で人為的に運ばれて来たものであるといえる。(第4図-1、図版3-1) 調査地区の西端の東向き斜面から多くの遺物と共に10~50cm大の花崗岩の自然石が散乱して出土した。当初は石の並び方や遺物の出土状況から墓地の可能性も考えられたため、出土状況の図面を作成した後サブトレンチを設定したが、下部に埋葬施設などがなかったことから墓ではないことが判明した。しかしこれらの自然石は前述したようにこの場所の地層には存在しないもので、何らかの理由で人為的に運ばれて来たものであるといえる。その理由については様々なことが考えられるが、一つには自然石と共に土師器皿・土師質火入れ・陶磁器



第5図 石垣平面図・立面図

片（摺り鉢・碗）などの生活用品（第6図-7～14、図版4・5-1～14）が多数出土していることから、周辺で居住していたことが考えられ、例えば後述するような石垣など屋敷の建築材として使用されたものではないかと推測できる。（第4図-2、図版3-2）

石垣は調査地区のはば中央のT.P.+171m付近で検出した。平面形態はL字型を呈しており、10～40cm大の花崗岩の自然石を最大で5段に積んでいる。そして石垣に沿って幅約30～50cm・深さ約15cmの溝が掘られていた。この溝は平面形態が逆S字型を呈しており、南東側は攪乱を受けている。石垣も原形を保っておらず、本来は溝に沿って5段以上積まれていたものと推測される。溝からは、肥前磁器碗（第6図-6、図版4-6）や花崗岩製の石臼（臼）などの生活用品が出土している。また石垣の裏込め土からも肥前磁器片が出土している。これは屋敷に伴う石垣と考える。（第5図、図版2-2）

（3）遺物（第6～8図、図版4～7）

◇集石部出土遺物

1・2は土器器皿、1は口径10cm・器高1.8cm・厚さ約4mm。完形品。2は口径10.6cm・器

高2cm・厚さ約4mm。約1/3欠損。(第6図-1・2、図版4-1・2)

3は陶器摺り鉢、器表面に濃赤紫の泥漿を掛けている。口縁部外面と内面直下に凸帯を巡らせていている。摺り目は7条。信楽焼。(第6図-3、図版4-3)

4は陶器丸碗、口径11.4cm・器高6.1cm・体部の厚さ約2mm。約1/3欠損。胎土は淡黄色で緻密。底部外面は無釉。文様は鉄絵(呉須?)で草木文が描かれている。京・信楽系陶器と思われる。(第6図-4、図番4-4)

5は陶器鉢、底径7cm。底部外面は無釉。約1/4欠損。胎土は灰色で砂粒子を含んでいる。外面は灰オリーブの釉薬が掛けられている。(第6図-5、図版4-5)

◇石垣部の溝出土遺物

6は肥前磁器染付碗、口径11.8cm・器高6.4cm・体部の厚さ約4mm。体部1/2欠損。体部外面の文様は丸文で、底部内面には五弁花文がコンニャク印判で押されている。高台置付部には砂が付着している。(第6図-6、図版4-6)

◇土器群出土遺物

7・8は土師器皿、7は口径9cm・器高1.9cm・厚さ約3mm。ほぼ完形品。8は口径9.6cm・厚さ約3mm。1/2欠損(第6図-7・8、図版5-7・8)

9は陶器碗、口径13cm・器高5.6cm・体部の厚さ約3mm。ほぼ完形品。胎土は淡黄色で砂粒を含む。底部外面は無釉。オリーブ灰色の釉薬が施されている。(第6図-9、図版5-9)

10~12は肥前磁器である。(第6図-10~12、図版5-10~12)

10は染付碗、口径7.6cm・器高3.8cm・体部の厚さ約4mm。1/2欠損。体部外面には草花文が描かれている。

11は染付碗、口径10cm・器高5cm・体部の厚さ約4mm。完形品。体部外面には草花文が描かれている。底部内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。高台置付部には砂が付着している。火を受けたためか口縁の一部が変色している。

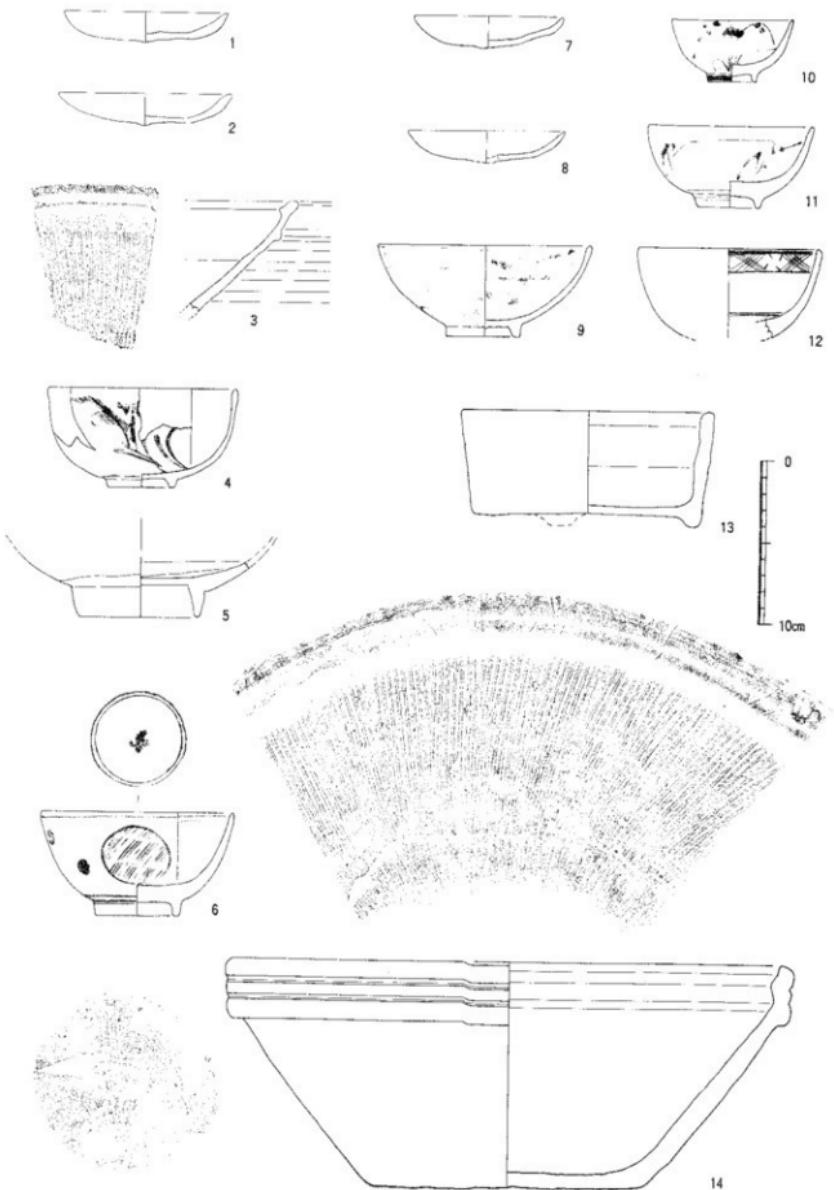
12は青磁染付蓋付碗の身、口径11cm・体部の厚さ約4mm。2/3欠損。体部外面が青磁で、内面に染付の文様が描かれている。

13は土師器火入れ、口径15.6cm・器高7cm・体部の厚さ約9mm。完形品。3箇所に脚が付いていたと思われるが、2箇所は欠損している。体部内面の口縁直下に煤が付着している。(第6図-13、図版5-13)

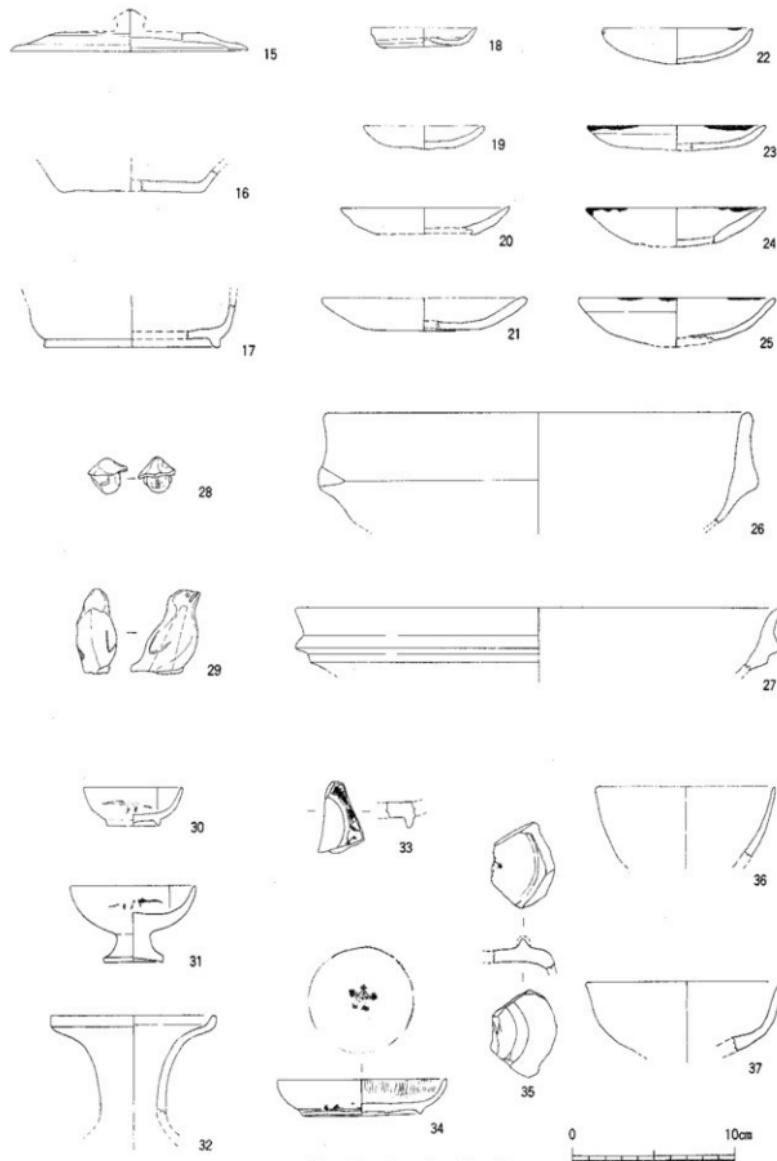
14は陶器摺り鉢、口径33.6cm・器高14cm・体部の厚さ約1.3cm。完形品。体部外面は口縁部外縁帶の直下までケズリ調整が施されている。口縁部内面直下の凸帯は不明瞭である。摺り目は8条。堺焼。(第6図-14、図版4-14)

◇包含層出土遺物

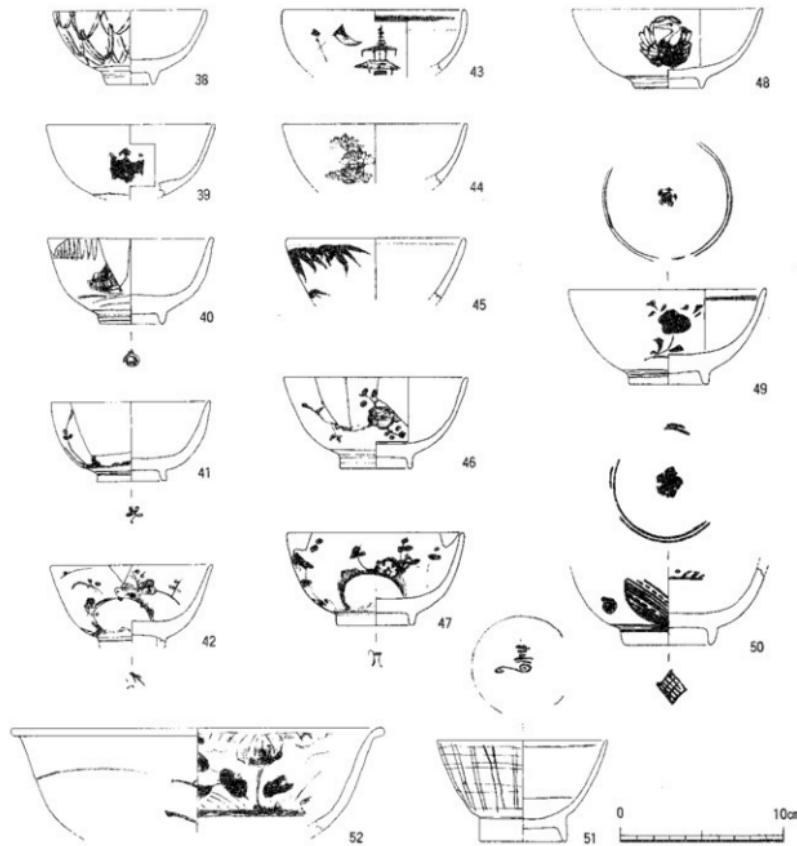
15~17は須恵器坏蓋・坏身、15は口径14.6cm・16は底径8.8cm・17は底径10.8cmの小片。(第7図-15~17、図版5-15~17)



第6図 出土遺物



第7図 出土遺物



第8図 出土遺物

18~25は土師器皿、18は口径6.6cm・器高1.2cm・厚さ約3mmの完形品、底部穿孔。19は口径7.4cm・器高1.5cm・厚さ約4mmの完形品。20は口径10.4cm・厚さ約5mmで2/3欠損。21は口径12.6cm・器高2cm・厚さ約6mmで2/3欠損。22は口径9.2cm・器高2.2cm・厚さ約3mmで1/3欠損。23は口径11cm・厚さ約4mmで2/3欠損。24は口径11.2cm・厚さ約6mmの小片。25は口径12.2cm・厚さ約4mmで1/3欠損。これらのうち22~25は、口縁部に煤が付着しており灯明皿である。(第7図-18~25、図版5-18~25)

26は瓦質土器、口径26cmの小片。口縁部外面に煤・体部内面に炭化物が付着している。27は土師器で口径30cmの小片、口縁部外面に煤が付着している。2点とも焙烙と考えられる。

28・29は土人形である。29は中心に穴があいている。(第7図-28・29、図版5-28・29)

30~52は肥前磁器である。(第7~8図-30~52、図版5~7-30~52)

30は染付紅皿、口径6cm・器高2.4cm・体部の厚さ約3mm。ほぼ完形品。体部外面には筆の文様が描かれている。

31は染付仏飯器、口径7.6cm・器高4.8cm・体部の厚さ約4mm。1/4欠損。体部外面には筆の文様が描かれている。

32は染付花生、口径10cm・頭部の厚さ約5mmの小片。口縁部は盤口形を呈している。

33は色絵、底部内面に赤絵が施されている小片。

34は染付皿、口径10.4cm・器高2.2cm・体部の厚さ約3mm。体部2/3欠損。裏文様には連続唐草文が描かれている。底部内面には五弁花文がコンニャク印判で押されている。底部は蛇の目凹形高台である。

35は青磁染付蓋付碗の蓋、体部外面が青磁で、中央に銘の一部がみられる。内面の中央には五弁花文がコンニャク印判で押されている。小片。

36・37は白磁碗、36は口径11cm・体部の厚さ約4mmの小片。37は口径12.4cm・体部の厚さ約5mmの端反り碗である。

38は染付碗、口径9.4cm。器高4.6cm・体部の厚さ約3mm。1/2欠損。体部外面には二重網目文が描かれている。

39は染付碗、口径10.4cm・体部の厚さ約3mm。1/2欠損。体部外面にはコンニャク印判による文様(不明)が押されている。底部内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。

40は染付碗、口径10.2cm・器高5.3cm・体部の厚さ約5mm。1/2欠損。体部外面にはコンニャク印判による文様(不明)と手書きによる文様が施されている。底裏銘は渦福。

41は染付碗、口径9.8cm・器高4.9cm・体部の厚さ約6mm。1/2欠損。体部外面には42や47と同じ文様が描かれている。底裏銘あり。

42は染付碗、口径10cm・体部の厚さ約5mm。1/2欠損。体部外面には梅や草木の文様が描かれている。底裏銘あり。

43は染付碗、口径11cm・体部の厚さ約3mmの小片。体部外面には寺と旗(?)の文様が描かれている。

44は染付碗、口径11.4cm・体部の厚さ約3mmの小片。体部外面にはコンニャク印判による松の木の文様が押されている。

45は染付碗、口径11cm・体部の厚さ約4mmの小片。体部外面には筆の文様が描かれている。呉須の発色が不良である。

46は染付碗、口径11.4cm・器高5.6cm・体部の厚さ約2mm。1/2欠損。体部外面には梅の木の文様が描かれている。底部内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。高台脇付部には砂が付着している。火を受けたためか白濁している。呉須の発色が不良である。

47は染付碗、口径11cm・器高5.7cm・体部の厚さ約5mm。ほぼ完形品。体部外面には梅や草木の文様が描かれている。底裏銘あり。高台疊付部には砂が付着している。

48は染付碗、口径11.8cm・器高4.9cm・体部の厚さ約3mm。1/2欠損。体部外面にはコンニャク印判による団鶴の文様が押されている。底部内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。高台疊付部には砂が付着している。

49は染付碗、口径12.2cm・器高5.9cm・体部の厚さ約4mm。1/2欠損。体部外面には草花の文様が描かれている。底部内面には五弁花文がコンニャク印判で押され、蛇の目釉剥ぎが見られる。高台疊付部には砂が付着している。

50は染付碗、底径5.4cm・体部の厚さ約6mm。体部外面には丸文が描かれている。底部内面には五弁花文がコンニャク印判で押されている。底裏銘あり。高台疊付部には砂が付着している。

51は染付碗、口径10.6cm・器高6.2cm・体部の厚さ約3mm。1/2欠損。体部外面には格子状の文様が描かれている。底部内面に文様あり。高台疊付部には砂が付着している。

52は染付皿、口径23cm・体部の厚さ約5mmの小片。裏文様には連続唐草文、体部内面には草花の文様が描かれている。

第3章 まとめ

今回の発掘調査では、溝2本・土坑11基・Pit 7基・石垣などを検出した。以下に総括してまとめとしたい。

第2章の2で述べたように遺構の多くは遺物の出土がなく、また出土した場合も小片であったため、その時期を確定することは困難であった。しかし、遺構面上層の包含層から出土している遺物や調査地区の西端の東向き斜面から出土している遺物を観察すると、その多くが近世の遺物で近代以降の遺物は混在していないことがわかった。このことからこれらの遺構は近世に属するものであると判断した。出土遺物の詳細については第2章の3で述べたとおりで、肥前で焼かれた磁器類が大半を占め、信楽焼や堺焼の摺り鉢・土師器皿などであった。またその時期については18世紀代のものが大半であった。これらの用途を観ると茶碗や摺り鉢・仏具・化粧道具・灯明具といった生活用品がほとんどであり、遺構として屋敷に伴うと考えられる石垣などを検出したことと考えあわせると、この地には少なくとも江戸時代の中頃に住居があったことが判明した。また表土下の埋め戻し土から近代の遺物が出土していることから、この時期に農地として整地されたと考えられる。

以上、今回の調査においては上田原地区の集落が今日のように変遷していった一端を知るための成果が得られた。

図版



1. 調査スナップ



2. 遺構全景（北西から）



1. 遺構全景（西から）



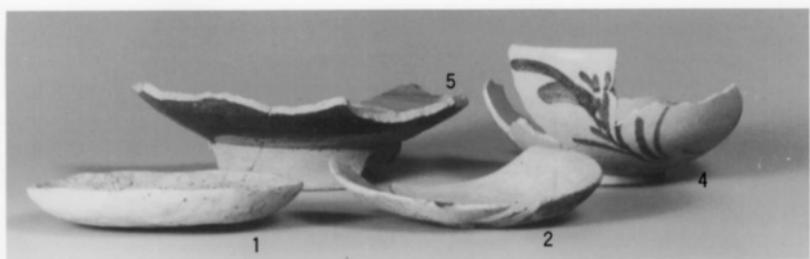
2. 石垣全景（南東から）



1. 集石部遺物出土状況（北西から）



2. 土器群遺物出土状況（北東から）

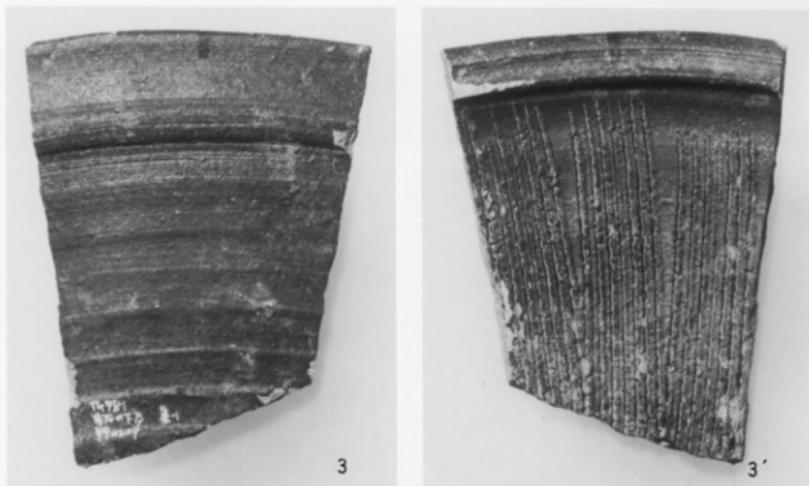


1

2

5

4



3

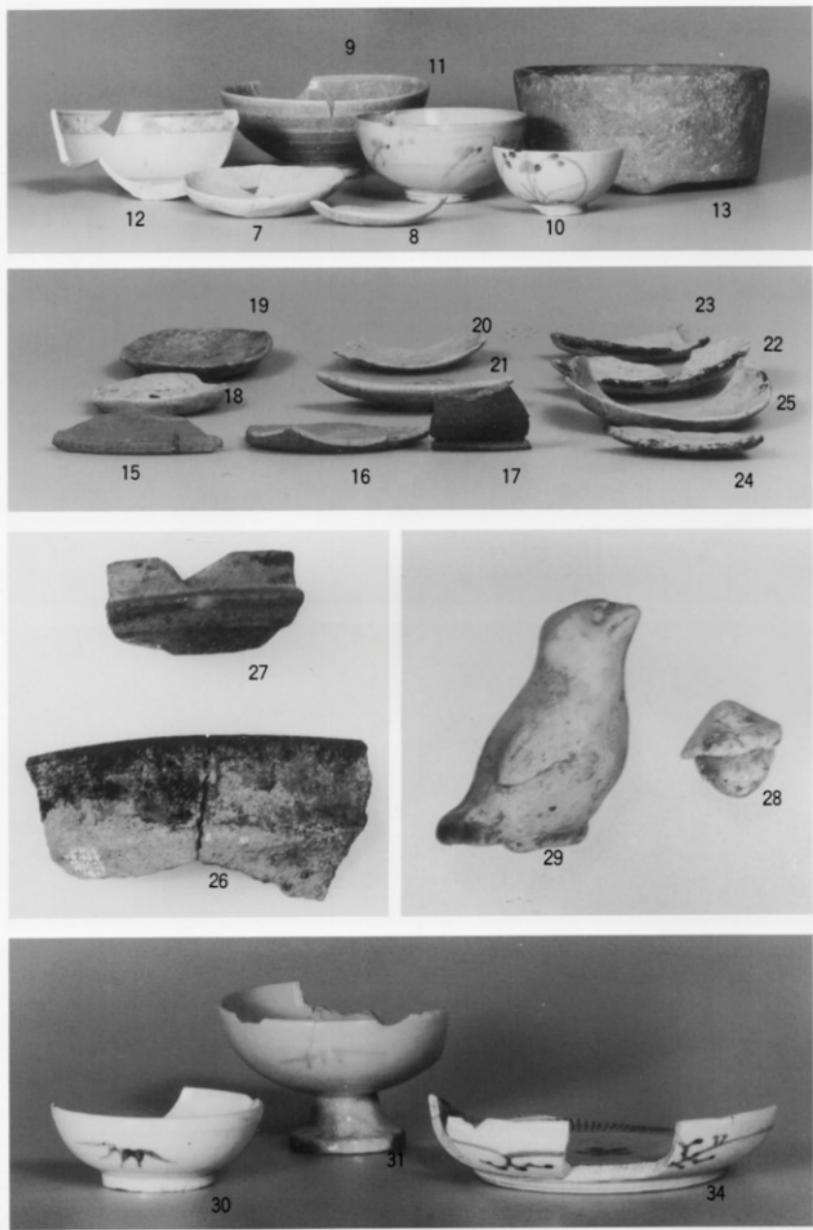
3'

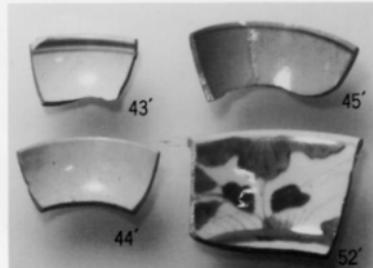
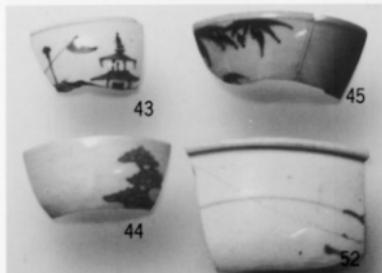
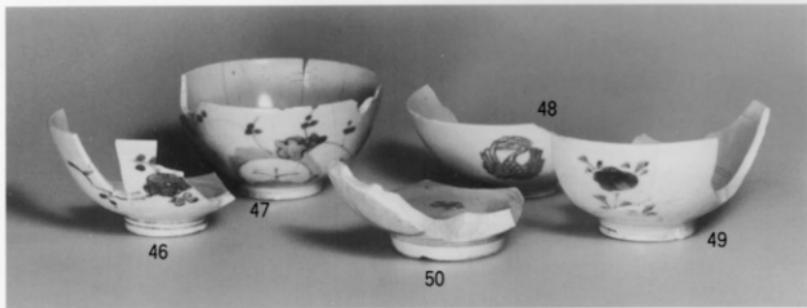
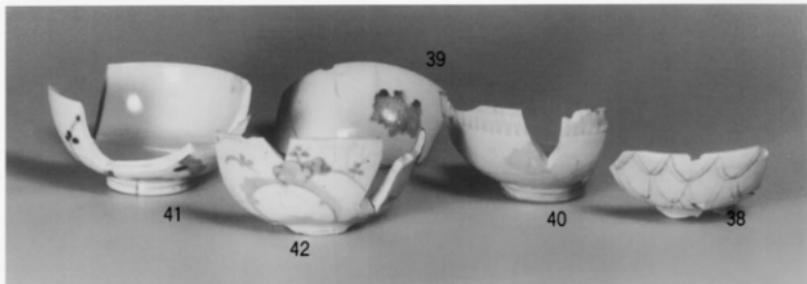
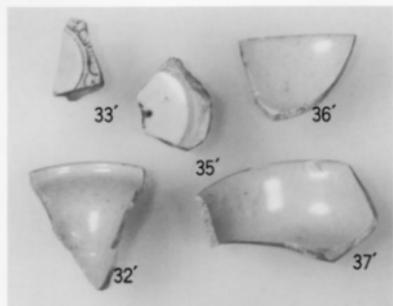
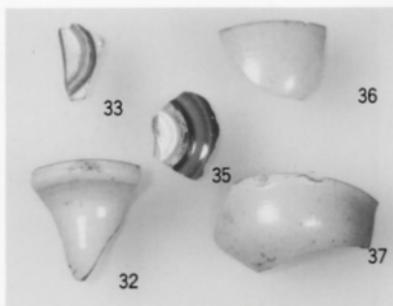


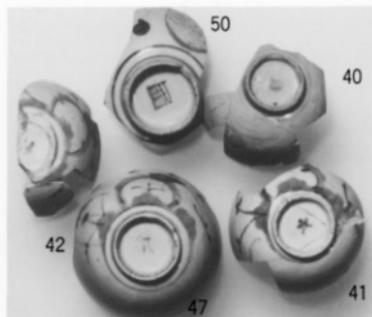
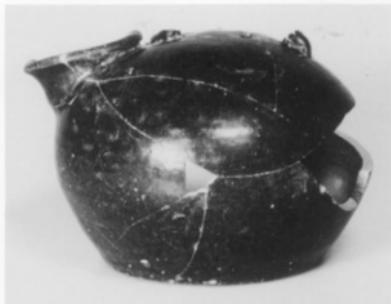
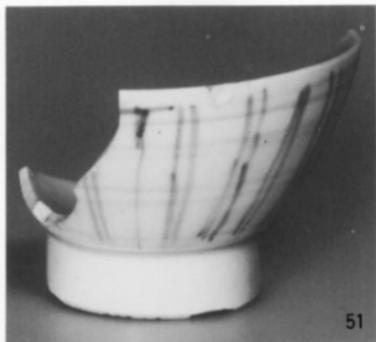
6



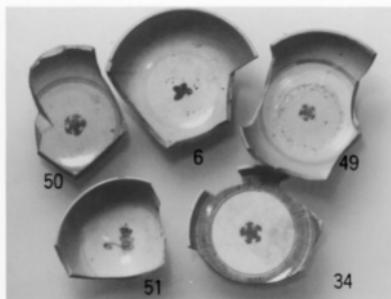
14







各種底裏銘



底部内面の文様



出土した肥前磁器

報告書抄録

ふりがな	てらぐちいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	寺口遺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	四條畷市埋蔵文化財調査報告
編著者	村上 始
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL 0720-77-2121
発行日	1999年(平成11年)4月30日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査の 原因
てらぐちいせき 寺口遺跡	しじょうなわてしかみたわら 四條畷市上田原	272299	34° 43' 05"	135° 41' 50"	平成10・16 ~平成11・4 ・30	861m ²	農地の 切り下 げ

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺口遺跡	集落跡	中世・江戸時代	ピット・土坑・溝・石垣	土師皿・肥前磁器・摺り鉢	

寺口遺跡発掘調査概要

平成11年4月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 加地企画印刷株式会社